研究ノート

「八重の桜」考
―会津落城とフクシマ原発事故

小　島　　定

は　じ　め　に

2013年のＮＨＫの大河ドラマ『八重の桜』が終わりました。毎週日曜日の夜を楽しみにしてこの一年間面白く見ることが出来ました。これに触発されて、俄然会津藩士とその家族の維新以後の生き方に興味をそそられ、会津の歴史や登場人物のことを急いで勉強し始めました。『八重の桜』に魅せられたのは、この間の「フクシマ原発事故」についての自分の思考を再点検し始めていたときでもあったからです。そのきっかけになったのは、遠方の友人たちとの会話でした。とくに５月に名古屋在住の高校時代の旧友と二十年ぶりに再会したとき、私なりの「福島からの発信」にその友人は目立った共感や反応を示してくれなかったことがありました。それは私の発信力、インパクトの弱さに原因があったことは明らかですが、この遠方の友人たちとの意見交換がフクシマ原発事故の問題に対する私の再考のきっかけになったのは確かです。

そうした事情から会津研究に向かうことになったわけですが、膨大な郷土史家たちの諸研究の山を前にして、自分が足元のことを、幕末維新史さえ十分に知らないことを痛感させられました。そして恥じ入るばかりでした。ここに発表するものは、もともと遠方の友人諸氏にその時々の想いをメールにして送ったものを基にしたもので、とても研究論文といえるものではありませんし、素人の研究事始の「エッセイ」の類にしか過ぎません。しかし、私としては、定

年退職を前にして自分なりの今後の研究をどうするか、新しい条件のもとでの自分の勉強の第一歩を、そしてその「心覚え」を記しておきたいという欲求もありました。そこで、本誌の「研究ノート」欄を借りて、思い切って発表することにしました。研究というレヴェルで言えば、何分にもこの分野では私は全くの素人に過ぎませんので、内容もその筋の専門家からすれば、周知のことも多いし、なかには思わぬ間違いや事実誤認も多々あると思います。本誌の読者の皆さんから、ご叱正やご批判をいただければありがたいと思います。

この間、一方で幕末維新期の会津関係の本をあさりながら、他方で、会津や京都、そして出石にも出かけました。会津はいつでも行けると思っていましたから、会津の探訪は後回しにしてきたのですが、６月30日に、終幕が近いというので、急いで会津の県立博物館の「八重の桜」展に行ってきました。展示は素人眼にもわかりやすく、また見所が多くて大変勉強になりましたが、会津への道すがら、猪苗代湖の北口に在って、ここを破られたために新政府軍が会津に入り込んだ「十六橋」や、激戦地となった戸之口原（大野ヶ原）の古戦場跡も回りました。そこから細い山道（旧白河街道）をぬけて国道49号線の強清水に出ましたが、旧街道の山道の途中当時の地元住民が建立したという『二十二士の墓』がひっそりたたずんでおりました。会津の史跡は１日ではとうてい回ることは無理なので、また下調べをしっかりした上で、今度はゆっくり市内の旧跡や史跡、墓石等を回ることにしています。

１、いまや八重の兄、山本覚馬についてもよく知られるようになりました。この間いくつか評伝が刊行されました。

ここで私が覗いた限りでの覚馬に関する主な著書をいくつかあげておきましょう。①青山霞村原著、住谷悦治校閲、田村敬男編集の『山本覚馬伝』（宮帯出版社、2013年。これは昭和３年（1928）の復刻版の資料編を抜いた本文部分のみ）が基本書ですが、これは「京都復興の先覚者」という観点から書かれ

たものといえます。もうひとつ「八重の桜ブーム」にあやかって、2012年にＮＨＫ出版から出た②鈴木由紀子『ラストサムライ　山本覚馬』（これも同『闇はわれを阻まず　山本覚馬伝』1998年、小学館、の増補復刻版）があります。内容的には、基本的な所は前書①に依拠しながら、最新の資料と調査を加えたものですが、前者①と対比すると、本書は基本的には「会津の視点」に立って書かれているといっていいでしょう。だから、たとえば、前書①のように後世の京都人から評価される維新後の覚馬とはちがった旧会津藩士のタイプとして、薩長への怨恨を持ち続けて、「萩の乱」に呼応して「思案橋事件」を引き起こした永岡久茂（斗南藩少参事）にも触れています。戊辰の怨恨ゆえに自から「暴発」していった旧藩士のタイプだというわけです。後で正面から触れることになりますが、旧会津藩士には、斗南藩として再興後強制移住させられた東北北端の地、下北半島の地での苦難の生活と共に、とくに若き旧藩士たちには維新後には「転身」の問題が突きつけられます。これは、時代状況はまるで違いますが、3・11後の福島の問題とも重なります。覚馬については、なお簡便に知るには、③小説風の安藤優一郎『山本覚馬』（ＰＨＰ文庫）もあります。これは幕末の政局をやや詳しく扱っているのが特徴といえば特徴です。

さらに、④松本健一が中公文庫から『山本覚馬』を出しました。この書には、覚馬が明治７年に出版した西周の『百一新論』が付録に付いており、興味深い論点がちりばめられています。また松本健一の会津藩士の研究としてその他に、覚馬と同じく京都守護職時代の会津藩の公用人（藩のいわば外交官）として活躍した、広沢安任（あんとう）については『犢（こうし）を逐（お）いて青山に入る』（ベネッセ、1997年）が、また会津の俊才といわれた秋月悌次郎については『決定版　秋月悌次郎―老日本の面影』（中公文庫、2013年。本書は同名の著書、作品社、1987年の増補版。）があります。幕末の会津藩の青年藩士として活躍して、その後の新時代明治を生きた三人三様の姿を見ることが出来ます。

覚馬については、後で詳しく言及するつもりです。

2、さらに会津藩の筆頭家老であった「西郷頼母」の話がこれまた面白い。6月にＮＨＫの「歴史秘話、歴史ヒストリア」という番組でも紹介されましたが、会津落城の直前になってまだ年若い一人息子（吉十郎）を連れて一人城を出て、米沢を経て仙台から函館戦争に参加したのち、最晩年には会津に帰って人生を全うします。大河ドラマ「八重の桜」では福島県出身の俳優西田敏行が演じる人物ですが、会津市内の観光名所の一つ、会津武家屋敷にある家老屋敷は頼母の屋敷の設計図をもとに再建されたものだそうです。私は頼母については詳しくは知りませんでしたが、「八重の桜」の宣伝の一環で、福島にやってきた歌手の加藤登紀子があるコンサートで、西郷頼母に非常に関心を持っていると言いましたので、へエーと思って頼母について調べ始めたわけです。郷土史研究の方々からなる西郷頼母研究会が『幕末激動期の会津家老　西郷頼母近悳の生涯』（歴史春秋社、1977年）を出版しており、またその中の一人の堀田節夫氏が、『幕末の会津藩家老西郷頼母』（歴史春秋社、1993年）を書いているので、彼の生涯を大まかにたどることができます。また短いものですが、会津に帰還した頼母自身が、明治29年（1896）９月に執筆した（その時頼母は66歳でいわば老境期の心境を綴った）自伝『栖雲記』 があり、このなかで会津藩の最期の時期のことを振り返っています。原文は高木盛之助著『沼澤道子君之傳』（明治45年）のなかに収録されており、今では国会図書館の近代デジタルライブラリーからダウンロードできます。堀田氏はまた『「栖雲記」私注』（東京書籍、1993年）や『「帰る雁が祢」私注―会津藩老・西郷頼母の晩年の日誌』（東京書籍、2007年）を刊行して、推測たくましく頼母の最期の時期の心境を解釈しています。先日、会津善隣寺（奈与竹之碑があることで有名）の頼母一族の墓を訪れたところ、たまたまある人から声を掛けられたのですが、その郷土史家の人は、頼母に関する一次資料をいくつか持っており、頼母の会津での晩年は、多くの親戚知己との交流も在り、堀田氏の言うように、そんなに寂しいものではなかったのではないか、と説教されました。郷土史の研究者の熱意と執念には舌を巻きます。頼母については評価は色々でしょうし、なお実証的

な調査研究を要すると思いますが、これまでの諸研究を読んで見ますと私には一つの頼母像が浮かび上がってきます。

筆頭国家老として彼の立場は、「会津を守る」という信念の一点から（頼母の行動はさしずめ「会津一国主義」とでも呼べようか)、藩主松平容保の京都守護職就任に際しては「辞退」を強く『諫止』し[1]、また鳥羽伏見の戦いに際しても「恭順」を、藩主容保に建策してきた人物として知られています。主君に対する臣下の封建的「忠誠」には、主君が誤りを犯しそうなときにその行動を諫める「諫止」が臣下の義務でもあるとする「封建的忠誠」概念（丸山眞男は『忠誠と反逆』のなかで、この点を強調して、絶対的服従一本で封建的忠誠概念を理解することの誤りを指摘している）の理解からすれば、「諫止」あるいは「諫争」は、君主への絶対的臣従と並んで、「封建的忠誠」概念の重要な柱の一つをなすものです。だが、先の番組によれば、彼は落城のとき一人息子を連れて城を出て、その後30年も生きました。

その番組を見たとき直ちに、私は、原発事故直後の福島では、ある自治体の首長が福島から「逃げた」という噂が飛び交いましたが（あくまで噂ですから、噂の中身も諸説あって、しかも事実ではないことが多いようだ)、頼母の行動はそれと同じではないかと思ったのでした。しかし、ＮＨＫの「歴史ヒストリア」では、頼母のこの行動を、家名存続を願って、一人息子が一人前になるまで親として面倒を見ようとしていたのではないかと頼母の出城を正当化するような見方をしていました。親が子供のことを第一に思うのは人間としての当然の行動であるというがごとき、今風の論理でもって、これを解釈していたからです。ＮＨＫの歴史番組を見るときは、史実を今の風潮にあわせて解釈す

1　容保公の京都守護職就任に頼母は「いまのとき、この至難の極に当たるは、所詮薪を背負って火を救うにひとしく、恐らくは労多くしてその益なからん」と激しい口調で反対したという話は有名です。(『京都守護職始末１』東洋文庫49、平凡社、1965、26）頼母はそのために家老職を一時罷免された。

るきらいがあるので気をつけなくてはなりません。こうしたＮＨＫの解釈を補強するように働いたことの一つには、頼母の身にかかわる―そして会津人にとってはきわめて重要な意味を持つ―事実もその背景にありました。

会津籠城戦が始まったとき、頼母の残された家族の女性全員、親戚も含めて21人が籠城に加わることを、籠城中の食い扶持を減らさないためにと「辞退して」、自分の屋敷で全員が自刃したという話はあまりにも有名です。これは、白虎隊の少年たちの自刃と並んで「会津の悲劇の最大の例の一つ」としてこれまでしばしば語られてきたところです。[2]

この西郷頼母のテレビ番組のことをたまたま同僚の一人と話していたら、彼はやや冗談めかして「自主避難」だと言いました。言うまでもなく、この発言は、同じ原発被災者といっても、強制避難させられた双葉郡の住民とは別に、原発立地地域から少し離れた地域、特に都市部の福島市や郡山市などで、かなりの数の市民が放射線の被害を恐れて（とくに子供への影響を心配して）、県外に自主的に避難した現象の事を指します。そして、そのことから福島県民の間に、いわゆる県外への自主避難者と残留者との間に微妙な形で生じた「心の溝」の問題を念頭に置いたものです。被災者間の「断絶」あるいは「分断」が、同じ原発事故の被害者でありながら、様々なレヴェルで住民間に生じているのが、今回のフクシマ事故で見られた悲しむべき現象の一つでもあることは福島に居る人ならば、周知の事実でありましょう。しかしこのことは、意外と県外の人々とくに遠方の国民の心には届いていません。

今も昔も、平民や一般市民ならともかく、それも許されるだろうが、何といっても、会津藩の筆頭家老頼母は危機迫る藩の本拠地、城の大将格の人物なのだから、この場合「自主避難」云々を論ずることはまったく当らない。事柄

2　自刃した頼母の妻、千重子の辞世の句はあまりにも有名です。

なよ竹の風にまかする身なれども　たまわぬ節もあるとこそ聞け

は、言ってみれば被災自治体の長が原発事故でいち早く避難したと言うあの「噂」と同じです。しかしまた、このことも公平に見れば、そのような噂が立つにはそれなりの背景と理由があるはずで、この場合、住民からすれば全くもって理不尽な事態に対する被害者市民の「やり場のない」不満が当該首長に向けられたものと解釈すべきでありましょう。

それと同じ事で、頼母は自主避難した一般市民とは立場が違う。藩を挙げての籠城中の指導者の一人なのだから、たとえ彼個人の「私情」を考慮したとしても、藩の運命を決する重大な決戦を前にして大将が「敵前逃亡」したと非難されても仕方ないのではないか、と私は一瞬思ったのでした。ドラマ『八重の桜』では、この場面が放映されましたが、頼母の出城は、「君命による出城」として描かれました。前掲の頼母研究によれば、主君より越後の前線に「軽い用命」を受けて出城したということで、その時頼母に対してはさらに「刺客」まで送られたと言われます。そのときのことについて、頼母自身は『栖雲記』のなかで、「実に胸つぶれむばかりの事をさへ仰せし」と書いているくだりが、そのことを指しているというのが、頼母研究の第一人者堀田節夫氏の解釈です。ちなみに『栖雲記』の問題のくだりでは、頼母自身は次のように書いています。

「さて、おのれは籠城中より、越後出張の老等がもとへ、軽き事の使を命ぜられてその事を果たし、直様北海に赴きしに、守の殿の面前にて、実に胸つぶれむばかりの事をさへ仰せしとかや、命を受けたりし人は今もなおありぬべし。」（傍点は筆者。堀田節夫『会津藩老・西郷頼母自叙伝「栖雲記」私注』（東京書籍、1993年、22頁。前掲『栖雲記』原文では15頁。）

西郷頼母は、よく知られている会津の人物だから、頼母のこの問題の行動については、おそらく他の解釈や違った評価もありうるだろうと思います。そして会津の人々は、この落城間際の頼母の「決断」についても、あるいは最晩年

になって帰還した会津での彼の行動についても、これまでどのように評価していたのか、あるいは現在ではどう評価されているのか、会津の人たちの一般的な受け止め方をもっと知りたいものだと思います。また、先の引用文中にある「直様北海に赴きし」とあるように、頼母は長子吉十郎をつれて、出城後ほどなく函館に赴き榎本軍に合流しますが、函館の戦闘が形勢不利と見るや、自ら官軍に「出訴」して帰順します。ここでも彼は非戦（「避戦」）の態度をとりました。函館戦争後は頼母は館林藩に幽因の身になりますが、松平容保がその後、日光東照宮の大宮司に任命されると、彼はその補佐として東照宮の禰宜になります。ここで旧藩主と「和解」することになるのですが、その前には一時西伊豆に逗留して、その地の名主たちと組んで郷塾「謹申学舎」の教師（頼母は皇朝学と漢文の教師）になります。その後福島に戻り、棚倉にある都々古別（つつこわけ）神社と伊達の霊山神社の神官を務めます。そして最晩年には故郷の会津に戻り、余生を漢詩と歌を詠み、いわばもぬけの殻のようになって人生を全うします（享年74歳）。籠城戦のさなか出城した先の事実と、また次のような彼の「辞世の句」とされるものからは、どうしても彼の晩年は寂しいものであったという印象を拭い去れません。

「あひつねのおちこち人に知らせてよ
　保科近悳けふ死ぬるなり」

藩祖保科家に連なる、自らの血筋に人一倍こだわっていた頼母近悳は、家名存続に期待した一人息子吉十郎も二十歳過ぎで亡くして、頼母の直系は途絶えることになりますが、そこで、頼母は富田常雄の『姿三四郎』のモデルとなったとされる柔道家の西郷四郎を養子に迎えます。小背で体躯も良く似ていたこともあって、会津では実子説も根強く存在しますが、確たる証拠は現在のところ見出しえないとされています。四郎を西郷家の養子として迎えるに当って、また原史料たるべき残存する複数の戸籍上にも齟齬があって、頼母の側の意図

についても諸説があります。

また西郷家の養子となった西郷四郎についても、興味深い話があります。西郷四郎は会津のすぐ隣、新潟県津川の生まれです。戸籍上は志田四郎、戸籍上の父志田貞二郎は会津藩御用場役150石の中級武士で、落城後旧会津藩領であった津川に定着して帰農しましたが（頼母の西郷家とは格段の差がある）、その後舟大工を営み、敗軍藩士の次男であった四郎は少年時代を津川で兄の手伝いをしながら過ごします。将来「イクグン大将」（陸軍大将の会津訛の表現）になるという夢を懐いて、会津藩士の伝をたよって上京しますが、体格不足（五尺一寸の体躯。また頼母もよく似た小背で「三尺達磨」と呼ばれました。これが実子説の有力な根拠の一つとされます）と数学に弱かったこともあって、在京の先輩から説得されて、陸士入学を断念します。それから今度は嘉納治五郎の講道館の門をたたき、最初の弟子の一人となります。そして、「山嵐」の技で大男を投げ倒して、「講道館の四天王」と呼ばれるほどになります。こうして嘉納治五郎に柔道家として将来を嘱望されるのですが、治五郎が欧州出張中（1889－91年）に、四郎は突然講道館を出奔して、朝鮮、台湾に出向いた後、1902年に長崎に登場します。同じく戊辰の戦いで敗北した旧二本松藩士の鈴木天眼（鈴木力）と出会い、天眼の主宰する長崎の「東洋日の出新聞」の記者となります。「東洋日の出新聞」には中国から辛亥革命の報告記事を16回にわたって書いています。そして長崎では、孫文を支援した宮崎滔天らとも結びます。このように、四郎はいわゆるアジア主義に惹かれた「大陸浪人」の顔も持っていました。

また当時長崎には旧会津藩士の日下義雄[3]が県知事になっており、彼を頼っ

3　日下義雄は、会津藩の侍医石田龍玄（常雄）の長男で、初名は石田伍助といった。日下は井上馨の知遇をえて、岩倉欧米使節団に同行して、アメリカに留学し、その後ヨーロッパを視察し、ロンドンで経済学を研究した。日本に帰国後は内務省などに勤務し、会津藩士では珍しく1886年（明治19年）２月に長崎県令（７月より知事に名称改称）の職に就いた。また長崎では、神保修理の実弟

て幾人かの旧会津藩出身者が集まり、長崎には一つの旧会津藩士の小さな「コロニー」が形成されていたようにみえます。四郎のほかにも井深彦三郎、白井新太郎など旧会津藩士の子弟のなかから「大陸飛翔」を志した「アジア主義」を懐く人物が輩出しています。こうした経歴からみても、下級ではありましたが旧会津藩士の次男であった西郷四郎という人物も幼少期に会津の悲劇を体験した旧藩士の子弟の一人としてアジア主義に転身していく一つのタイプとして考察する価値があります。さしあたり簡便に四郎を知るには星亮一『伝説の柔道家西郷四郎の生涯』（平凡社新書、2013年）が便利です。なお、四郎については、郷土史家の牧野登『史伝西郷四郎』（島津書房、1983年）が基本文献とされています。

話を戻して、頼母の自叙伝『栖雲記』を読んでみますと、今では、「和戦恭順派」という評価や非戦（避戦）論者という積極的評価もありえますが、西郷頼母という人物は会津戦争の大事な初戦となった白河口の戦いでは敗戦の将でもあり、いざという時には、戦陣を率いる才覚には欠けていたように私には思われます。会津の藩祖は有名な会津藩の『家訓(かきん)15ヵ条』を制定した保科正之（二代将軍徳川家忠の非嫡出子）ですが、西郷家は藩祖保科氏の系譜につながり、西郷家は二代まで保科姓を名乗っていた名家です。その十一代が頼母近悳(ちかのり)です。そして頼母は自らの家系の「誇り」を人一倍強くもっていた人物のようで、落城後には彼は保科姓に戻ります。彼の生き方を貫くものとして、なんとしても藩祖保科家に連なる家名の存続という強い意識があったようで、保科姓を西郷支族の西郷鉄次郎の孫の近一に継がせています。他方、四郎を西郷家の養子に迎えたのは保科家とは別に西郷家の再興を意図していたとも言われます。[4]だからでしょうか、時の主君容保は美濃国高須藩か

北原雅長（『七年史』の著者）が選挙で初代長崎市長として当選したこともあった。

4　西郷頼母研究会『幕末激動期の会津家老　西郷頼母近悳の生涯』（歴史春秋社、

らの養子ですから、そもそも藩祖保科氏の家系に連なる意識の強い頼母としては、主君容保との間にもともとある種の疎隔を感じていたようです。したがって藩主容保に対する頼母の「諫止」の所作もよくよく検討してみる必要がありそうです。国家老職に在る者として、藩財政逼迫の事情に知悉していたということも当然想定しうることがらですが、それとはまた別の問題として、頼母についてはさらに詳しく追究していく必要があります。まだ論及すべき論点もありますが、今はこのくらいにとどめます。

３、大河ドラマでは、八重をはじめいろんな女性のタイプが描かれます。ＮＨＫのドラマも、そこにひとつの焦点を据えていることは明らかです。ドラマに登場する会津女性のなかでも、私が興味をそそられる人物が幾人かいます。あまり目立ちはしませんが、会津時代の覚馬の妻うらもその一人です。

会津落城後の京都時代の八重の「転身」がテレビドラマでは後半部分のハイライトになりましたが[5]、父権八の討死後、京都にいた覚馬の生存を知った山本家の家族（八重と母佐久、および覚馬の娘のみね）は、明治４年になって上洛して覚馬に再会して、そしてキリスト教大学の設立を企図して京都に現れた新島襄ともつながり、八重は以後生涯を終えるまで京都で暮らすことになりま

1977年、114頁）

5　八重の転身についていえば、テレビドラマの中では、「ならぬことはならぬ」という「什の掟」の会津精神を引き継いで、京都で新島襄という新時代・新思想の人物を新しいパートナーとして得ることによって、その精神をいわば裏返して、それこそ今風に（「前向きに」ということだろうが）表現して「よいことはよいのだ」と八重に言わしめていました。客観的な史実だけでは見えてこない渦中の人物の心情の転換などの内面的な部分は、作家の「推測」が入る余地があり、その「想像力」が大いに発揮される所ですが、『八重の桜』の作者山本むつみによる八重のこの転身の描き方は、それはそれで、なかなか巧みで感心しました。

す（上方の人間になった八重）。落城後上洛前の間しばらく、八重一家が、会津藩の砲術部門の師範になった八重の最初の夫、川崎尚之助（但馬の国出石藩の医師の次男）の弟子の一人であった米沢藩士内藤新一郎の家に「出稼ぎ人」として逗留していた事実を示す新資料が昨年「米沢藩文書」の中で発掘され、新聞でも報じられました。ドラマでもその事実が織り込まれました。しかし、ここがポイントですが、覚馬が容保の京都守護職就任とともに上洛して以来（覚馬は死ぬまで会津には帰っていない）、自らは会津に残る決断をした覚馬の妻うらは、覚馬との間の娘のみね（峰）を、八重らの上洛に託して、覚馬と離縁します。ドラマのなかでは、覚馬を世話する京都の女、時栄の存在を知ったうらは「女にも意地と言うもがありやす」と言っておりました。その後の彼女の消息は詳細不明なのですが、会津藩のお家再興が許された移封地、下北半島の斗南藩の地に移って暮らしたという話もあるし、また覚馬との離縁問題には鈴木の前掲書が女性の視点から、いろいろ推測をめぐらしています（盲目の覚馬を京都で世話する新しい女性時栄の登場の問題をめぐって）。一方でＴＶでは華麗な「転身」を遂げて行く「ハンサム・ウーマン」八重とは対照的に、覚馬との離縁を求めたうらの決断と行動に、ドラマでは八重の陰に隠れた、会津藩士の妻というもう一つの女性像を見ることができるのではないか。ちなみにドラマでは、うらは封建武士の貞淑な妻として描かれて、夫が「東を見ていろというと、いつまでも東を見ている」ような女性だったといわれています。八重とは対照的な女性像であって、その後の彼女の消息と生き方を知りたいものです。

八重もまた上洛時には川崎尚之助と離縁します。川崎尚之助は、但馬国出石藩の医師の家の出身ですが、江戸に出て蘭学を学び、大木塾で山本覚馬と知り合います。覚馬に請われて会津にやってきて、日新館で蘭学と西洋砲術を教授します。覚馬の妹八重と結婚して、会津藩士に取り立てられ、会津の「来援の勇者」の一人になりました。彼の生地出石は山陰の片田舎の小藩ですが、ここは信州上田の仙石氏が移封して、ソバの技術を移植したことで、今では出石蕎

麦を観光の目玉のひとつにしている所です（いま出石の町には蕎麦屋が驚くほどあります）。また藩校「弘道館」を建てて、多くの人材を輩出した教育熱心な藩でもありました。藩校「弘道館」の跡も出石の観光名所のひとつになっていますが、それを指導したのは代々医学者で儒学者の家系である桜井家です。桜井家からは明治期内務省地理局長時代に天気予報を整備した桜井勉や京都帝国大学医科大学の教授桜井恒二郎、初期キリスト者の一人として有名な木村熊二らの俊才兄弟が出ました。長男の桜井勉は、後年出石の地誌と歴史を隈なく著した『校補但馬考』（兵庫県郷土誌叢刊、大正12年。今日では臨川書店の復刊、1973年で読める）を執筆し、出石の郷土史研究に貢献しました。（出石の桜井家はさしずめ会津の山川家に匹敵するだろう）弘道館からはまた初代東京帝国大学総長となった加藤弘之が出ました。出石の町には加藤弘之の生家も残っていて、郷土の誇りとなっています。また会津の女性で「小公子」の翻訳で知られる若松賤子の夫、巌本善治も実は出石の出身です。さらに農民出身ですが、苦学のうえ弁護士となり、のちに衆議院議員となって、昭和初期に粛軍演説や戦争批判をおこなった代議士の斎藤隆夫も、この出石の中村という所で生まれました。会津に比べれば小藩ですが、海がない山間の盆地で、会津に劣らぬ教育熱心な所が似ています。

八重の最初の夫尚之助の晩年はどの本を見ても悲惨だったようです。[6] この二人の関係や離縁にいたる経緯も―原発事故後われわれの周りで散見された福

6　例えば、あさくらゆう『川崎尚之助と八重』（知道出版、2012）。尚之助は斗南藩の窮状を救うためにおこなった米の販売契約で外国商人との訴訟事件に巻き込まれ、その責任を一手に背負って、東京の鳥越に引きこもりました。その晩年は貧苦の暮らしをしていたようです。そのとき作った彼の狂歌が伝えられています。

「このころは金のなる子のつな切れて　ぶらりとくらすとりこえの里　今日はまだかてのくばりはなかりけり　貧すりゃドンの音はすれども」（あさくら　ゆう『川崎尚之助と八重』（知道出版、1912年、229）。

島の内部の問題に意識を凝らして―仔細に調べていけば、会津がいわば非常事態に置かれた時、「在地の会津人」と「会津のために闘った余所者」との関係の問題として、新たな角度から光を当てることが出来るかもしれません。

尚之助は明治８年３月20日肺炎で死去。享年39歳でした。あさくらゆう氏の著書には、出石町の願成寺に川崎家の墓を発見して、発掘した墓から尚之助の遺品を発見するというスクープものっています。あさくら氏の調査によれば、尚之助の遺骨は無縁扱いで埋葬された可能性が高いという。（同上、231）いまでは出石の宗鏡寺と願成寺の前に川崎尚之助の真新しい供養の碑が立てられています。

４、他方、京都にいた覚馬の方は失明して、うらとの離婚成立後すぐに、京都で身の回りの世話をしてくれた20も歳の離れた若い女性「小田時栄」（時恵と書いている本もある）と再婚して、二女の久栄をもうけます。久栄といえば、かの『自然と人生』で知られる小説家徳冨蘆花（本名健次郎、徳富蘇峰＝猪一郎の弟）との「婚約破談事件」が有名です。なおまた、後妻の時栄が旧会津藩士のある青年と不倫事件を起こして（青年藩士の特定をめぐって諸説があります）、山本家でも大問題となります。このとき八重が「臭い物に蓋をしてはならない。事は、はっきりさせねばならぬ」と息巻いたという話も伝わっています。これをきっかけに時栄は山本家から追い出されます。従って京都若王子山頂の同志社墓地内には、兄覚馬の墓標とは別に（覚馬は同志社英学校の設立人の一人ですから、単独の墓標があります）八重が建立した山本家の墓があり、父権八、母佐久、弟三郎、そして覚馬の二女久栄の墓標はありますが、時栄の墓標はありません。二女久栄と徳冨蘆花との関係については、後年蘆花が自伝的小説『黒い眼と茶色の目』（大正３年）を書いて、久栄は、主人公「敬二」（蘆花本人）の恋愛相手の「寿代さん」の名前で登場します。「敬二」の青年らしく熱っぽいが、離別に際しては、しかしやや「寿代」（久栄）に対してはある種の軽蔑を含んだ（母の時栄を祇園の子と蘆花はみなしていたようです）揺

れた恋愛感情が描かれます。そして徳富家や山本家や新島家、そして伊勢家（長女のみねは伊勢（横井）時雄に嫁いだ）の人々がよってたかって、当時の通例の考えに従って、学生身分の二人の婚約に反対して、二人の婚約が破綻にいたる様を蘆花は描いています。小説では、婚約を破棄したのはあくまで蘆花の決断でした。自伝的とはいえ、あくまで小説ですから、ここから一家内の事実関係を確定することは出来ませんが、山本家（小説では「山下家」、したがって山本覚馬は「山下勝馬」の名前で登場します）のなかの様々な葛藤を想像することは出来ますし、またそこからは蘆花の眼を通した「イエ」の重圧の問題も浮かびあがってきます。そして兄猪一郎（徳富蘇峰）に対する蘆花のコンプレックスや葛藤、そして彼のナイーヴな情感もよく伝わってきます。当時の同志社の人物の姿も、それと判る仮名で登場しますので、蘆花のこの小説は大変貴重な史料です。ちなみに久栄はいわゆる「飛んでいる娘」だったようで、彼女が21歳で死んだとき、義兄にあたる横井時雄は「爆裂弾を抱いた女性だった」と評したそうです。(『増補改訂新島八重と夫、襄』、思文閣出版、2012年、本井康彦の発言）後期トルストイに心酔した蘆花のこの自伝小説も、ジャーナリズムで華々しく国論を張る兄蘇峰との関係や、あるいは「ハンサム・ウーマン」八重と覚馬の京都時代というテーマを考える上でも、外せない資料の一つといえます。

また、先妻うらとの間に生まれた長女のみねとの関連で私の眼を留めた事実があります。みねは、八重らとともに上洛して実父の覚馬が引き取ったわけですが、同志社女学校に入学し、成長してから、父覚馬の勧めもあってでありましょう同志社の一期生となったいわゆる「熊本バンド」の一人、横井時雄（当時は伊勢時雄と名乗っていたが、幕末の有名な開国派の思想家、横井小南の長男）の妻になります。当時、旧長州藩士の県知事槇村正直と対立して京都府顧問を解雇された覚馬は、新島の片腕となって同志社の設立に参画しました。京都にキリスト教大学の設立を勧めたのは覚馬でした。同志社の新島研究者は、覚馬なくして京都に同志社設立はありえなかっただろうと一様に主張していま

す。設立されたばかりの同志社の第一期生となったのは熊本英学校から編入した連中、いわゆる「熊本バンド」の面々ですが（徳富蘇峰、海老名弾正、小崎弘道、金森通倫ら）、横井時雄（伊勢時雄）もその一人です。実はこの横井時雄（伊勢時雄）は、私がこれまで明治プロテスタント史の研究の関連で注目していた人物の一人です。横井時雄（伊勢時雄）は、熊本藩出身の幕末の開明的思想家横井小楠の長男で、熊本英学校時代に花岡山の「奉教趣意書」に賛同していた一人ですが、一家挙げての強い反対にあって、苦難のうちにキリスト者に転身した一人です。そして同志社卒業後新島の屈強の弟子として最初の日本人宣教師となり、伊予の今治で目ざましい布教の成果を挙げました。明治初期プロテスタント運動ではとても有名な人物です。[7]その彼は、他方で私が別筋で調べていた朝河貫一ともつながりがありました。

朝河貫一は、福島の旧二本松藩士（会津落城前に新政府軍に抵抗して戦い敗北し、白虎隊と並ぶ「少年隊の悲劇」が起こった藩としても知られる）の長男（1873年生れ）で、1895（明治28）年アメリカにわたり、国際的にも封建制の歴史研究者として活躍した人物です。日露戦争当時在米中の朝河は、Russo-Japanese Conflict（New York, 1905）と題する、今日でも十分通用しうるような、歴史資料に依拠した浩瀚な学問的著作を発表しましたし、ポーツマス講和条約の締結に民間サイドで尽力した一人です。また戦後は明治41年（1908）に日本語で『日本の禍機』を発表して、大陸進出を図る日露戦後の日本外交の「私曲」に警告を発して、国民には「自制心ある」愛国心を説きました。その朝河に、彼が米国留学を準備していた東京専門学校（早稲田大学の前身）時代の東京で洗礼を施した本郷教会の牧師が当の横井時雄であったので

7　横井時雄の研究は本格的にはまだこれからですが、彼は昭和２年（1927）に死にます。翌３年４月に追悼演説会が開かれ、『故横井時雄君追悼演説集』（アルパ社、昭和３年）も刊行されました。本書には徳富蘇峰、小崎弘道、浮田和民、綱島佳吉、内村鑑三といった錚々たるメンバーが寄稿しています。

す。こうして、最近になって私が着手し始めていた研究にも小さなひとつのつながりがでてきたというわけです。

さて同志社英学校の最初の設立人に新島襄とともに名を連ねた覚馬は、廃藩置県後京都府知事としてやってきた旧長州藩士の槇原正直に引き立てられて京都府顧問におさまります。禁門の変と鳥羽伏見の戦乱で焼け野原となり、奠都後もぬけの殻のようになった京都の戦後復興に、とくに産業復興の面で、西洋事情の知見を生かして京都の復興と近代化に力を発揮します。これは覚馬が新政府に提出した建白書、いわゆる『管見』（これも同志社大学のデジタルライブラリーで読むことが出来ます）の地域版の実践といえるものでしょう。ですから、この側面、つまり転身後の覚馬の「京都の産業、教育および府の復興者」という側面が―わたしはそこに旧会津藩士覚馬の「転身」した姿を見るわけですが―、一般に京都の研究者には昔から高く評価されてきましたが（前掲①の覚馬研究の文献）、今や「八重の桜ブーム」の中で一般に覚馬への評価も非常に高くなっているといえるでしょう。だが、私は敗者会津の側から覚馬を見ようとしています。ある意味では、覚馬も今の世評からすれば、ある意味で「華麗な」転身を遂げた旧会津藩士の一人ということにもなります。覚馬は顧問解任後、新設された府議会議員となり、初代の府会議長も勤めましたし、またその後京都商工会議所の重職にも就きました。明治期の京都の著名な財界人はみんな覚馬の弟子たちでした。覚馬の転身といえば、彼自身のキリスト教への入信もその「転身」の重要な内容のひとつと考えなければなりません。彼のキリスト教への接近は、新島に出会う前のことでした。宣教医M．L．ゴードンから『天道溯原』というキリスト教に関する漢訳の普及本を贈られ、「魂を揺さぶられるほどの衝撃」を受けた（②鈴木前掲書、159）と言われます。[8]しか

8　旧会津藩士でクリスチャンになった有名な人物に、新島系列とは別に井深梶之助がいます。彼も会津きっての名門の家老の家柄、井深家の長男ですが、会津戦争当時、白虎隊に入れない年齢の少年で、会津籠城の際には藩主の小姓とし

し実際に彼が受洗するのは、一切の公職を退いた後のこと、覚馬はその点ではけじめをつけていたといわれます。

5、「転身」といえば、一般に藩主に「忠義」を尽くした旧幕藩側の藩士たちのその後、すなわち仇敵、薩長藩閥政府の下での「転身」は、それ自体実に重いテーマです。私のゼミで先日、福沢諭吉の「痩我慢の説」を読みましたが、この論考は見ようによっては、啓蒙思想家福沢の「武士道論」とでもいえるものです。ちなみに、この論文は、明治24年に脱稿されたのですが、発表されたのは明治34年の『時事新報』紙上であって、福沢の最晩年のことです。周知のように、その中で勝海舟と榎本武揚の二人の旧幕臣高官の著名な人物を取り上げ、維新後政府の要職に就いて旧幕臣の過去をすっかり忘れたかのように、今世の栄誉を享受して満足していることに福沢は厳しい批判を投げかけます。旧幕臣たちの「忠誠の転換」という観点から見ると、御一新によって、特に若い藩士たちには、人生の途上でいわば環境と忠誠の対象がまるで一変するわけですから、この問題は本人たちにとってはもとより大変な問題であったことは言うまでもありませんが、われわれから見ても、普遍的な問題を含む重要なテーマです。

会津藩士の問題に戻って言えば、彼らの中から維新以後、軍人や学者など有能で国家的にも重要な役割を果たす著名な人物が多く輩出します。それがまた今日の会津人にとっても大きな誇りにもなっているわけですが、大河ドラマ「八重の桜」でも頻繁に登場した山川一族の兄弟姉妹はとくに有名です。長兄山川浩（大蔵）は、籠城中彼岸獅子を引き連れて入城したエピソードが有名で

て容保のそばに侍っていたので、彼の籠城中の回顧録は、会津戊辰戦争を会津の側から見るときの第一級の史料でもあります。そのほかにも大変興味深い内容が含まれています。今読めるのは、『井深梶之助とその時代』第1巻所収（明治学院、昭和44年）です。なお脱稿後、星亮一『井深梶之助伝』（平凡社、2013年）がでました。

すが、会津藩が減封の上移封された下北の地（この近辺にも六ヶ所村の原子力施設があります）斗南藩の最高責任者（大参事）になります。いわば敗戦処理が彼の大きな役割になりました。三男山川健次郎もアメリカで物理学を学んだのちに東大総長になり、今では会津人の誇りとするひとりです。[9]長女二葉は、奥羽越列藩同盟の結成に奔走した梶原平馬の妻でしたし（のち離婚）、のちにお茶の水女子大の前身である女子高等師範学校の舎監となります。四女の咲（子）（捨松）は、日本最初の女子留学生となって、米国留学生活を送り、やがて薩摩藩出身で会津攻撃の西軍の参謀でもあり、のちに帝国陸軍大将となる大山巌の後妻となって、「鹿鳴館の花」と言われました。ドラマ「八重の桜」でも、明治時代の山川家の人々の姿に一つのスポットが当てられました。

ところで、「いわれなき賊軍の汚名」、これが会津人の戊辰戦争敗北後の共通の一般的な受け止め方といってよいでしょうが、わたしから見て、今回のＮＨＫ大河ドラマ「八重の桜」の最大の功績は、戊辰戦争に対するこうした「会津からの視点」を全国の人々に知らしめることになった点にあると思います。そもそもＮＨＫがこのテーマを大河ドラマに選んだのは、「福島の復興への支援」

9　幼き頃から秀才の誉れ高かった山川健次郎は、落城後猪苗代に謹慎中であった秋月悌二郎から越後戦線に来ていた長州藩士奥平謙輔（後の萩の乱の首謀者の一人として散ることになった一人です）の手に託されて、ある意味で新政府の庇護を受けて、学者の道を歩みました。やがて東大総長という立身出世の頂点に登りつめました。（長兄山川浩は西南戦争で西郷軍と戦ったのち、陸軍に残りますが、後年高等師範学校の校長になっています）ここには会津藩士秋月悌二郎と長州藩士奥平謙輔との親密な個人的なつながりという興味深い事実が見られました。戊辰の戦争では敵味方と分かれた各藩の優秀な青年藩士たちは、もともと幕末の江戸に上って塾や講義所で交わっていたわけで、彼等の間には狭い藩の枠を超えて将来の日本国家を見据えた人脈、いわば一つのネットワークが形成されていた点が重要です。覚馬と川崎尚之助を結びつけたのもこの現象の一つです。この幕末の俊秀たちの藩を越えた人間関係、「ネットワーク」の意義にもっと眼を向ける必要があるでしょう。

だというのが、宣伝文句になっています。したがって、福島県人（特に会津の人々）の間では「八重の桜ブーム」が起こって福島復興の後押しとなっているわけです。そしてわたし自身は、ＮＨＫの意図は別としても、こうした認識、会津の視点から見た幕末・明治維新史への問いかけが（もっと言えば日本の近代化のありように対する根本的問い直し）、日本国民共通の歴史認識の中にしっかりと位置づけられることを願っています。やや大げさに言えば、「3・11フクシマ原発事故と日本近代化の見直し」ともいうべき問題です。しかしその反面で、長州の側ではこれに対する反発もあるやに聞いています。したがって、ひょっとすると、今後会津からの見方に対する反動として、これを「地域ナショナリズム」だとする批判が出てくるかもしれません。いわゆる例の慰安婦問題がそうであるように、つまり「過剰な被害者意識」だとする「反動」が、また原発事故後の福島への政府の多額の復興資金投与を、福島の「過剰な被害者意識」に政府がいわば擦り寄る「過剰な優遇」だとでも言うような、言ってみれば「ひがみ意識」とでも呼べるような世論が大きく膨らんでこないとも限らないからです。そんな兆しが見えないわけでもありません。福島の被災者からは猛反発を食らった「原発事故で直接死んだ人はいない」との自民党政調会長の先頃の発言は、そうした今は押さえられている隠れた世論の兆しとならないとも限りません。これはわれわれにとっては、憂慮すべき事柄の一つです。

この政治家は、単に事実を述べたまでと弁解するでしょうが、福島の人間から言わせれば、当初の津波被害でまだ生存していたかもしれない隣人や近親者の生命を、原発事故で強制避難せざるを得ず、結局救出できなかった浪江町の消防士たちが流したあの無念の涙や[10]、最短の避難ルートが放射線が高いとい

10　更に付け加えれば、浪江町には、事故当初一切の事故情報や放射線拡散情報は国からも県からも与えられませんでした。SPEEDI（放射線拡散予測システム）から得られた情報は浪江町の全町民避難前には発表されず、国からも県からも

うのでわざわざ大回りして、バスで300キロも移動せざるをえなかったために、双葉病院の入院患者が多数生命を落としたという事実（「原発関連死」）等々、こうした事実に決して彼女（彼）は眼を留めようとしていないことが一番の問題です。こうした事実を無視した責任ある立場の与党政治家の発言を、福島の人々は決して許さないでしょう。それは決して「過剰な被害者意識」から出たものではない。この与党政治家の発言に見られるのは、あきれるほどの「想像力の欠如」だと言わなければなりません。しかし己の側の「政治責任」を棚に上げておいて、そしてまた己にとって「不都合な事実」に眼を塞いでおいて、己の（又政府の）権力利益から（としか私には思われない）福島を見る見方が、私には、「厄介な物」を遠ざけておいて、もっぱら己の経済的利益と「今の平和で安穏とした暮らし」（それは一つの幻影でしかないのではないでしょうか）を維持し追求することにのみ汲々とするような国民意識とどこかでシンクロナイズしているように思えます。そして、かの政治家の発言は、こうした国民意識を助長することに手を貸すものだと思われてなりません。しかし、いずれにせよその政治家の発言は、本来差別なく「国民の生命と生活」を守ることを使命とするはずの、そして将来の国家の方向を示す役割を担うはずの「本物の政治家」の口からは決して出てくる言葉ではないでしょう。単に不用意な発言だと言うよりも、原発再稼動への流れに棹差す与党・政府の政治家の本音が出たものと見るべきだと思います。この戦後生まれのタカ派の女性政治家にも「平和ボケ」があるのではないか。

正しい情報がないまま、浪江町当局の避難誘導は、結果的に避難した住民を余計に放射線高濃度の地域の方向に向かわせてしまいました。その責任はこの国のいったい誰が取ったというのだろうか。オリンピックの東京招致に際して「東京は大丈夫です」という言い草は、福島のことは無視していいのかと外国人記者に批判される始末でした。まことに恥ずかしい限りです。しかし、この「無責任体制」の国家の作為と無作為の根は、外向けと内向けを使い分けるこの国の指導者の精神のどこかに巣くっているといわざるを得ません。

「救えた命」があったかもしれないのに、強制的避難指示のために、津波現場に残して去らなければならなかった浪江町の消防士が流したあの悔し涙は、また鶴ヶ城開城後の敗戦処理に当った旧会津藩士たちの無念さを思い起こさせます。戦死した会津藩士の遺体収容を当時の新政府民政局が許さず、会津藩士の遺体が長い間放置されたことに対する憤りと悔しさは想像するに余りあるものがあります。これは会津人として忘れてならないことの一つだと今も語られています。(渡部孝「余市開村記念碑の物語るもの」『会津史談』71号、151頁、1997年)

いずれにせよ一途に「いわれなき賊軍の汚名」を雪ぐこと、そこに旧会津藩士たちの心はあったはずで、あの藩主への「忠誠心」の価値を丸ごと否定して、すっかりそれを捨て去ろうとしないかぎり（藩士の場合はなおさら)、敗戦後の彼らはそれをひとつの目標にして、さまざまな分野でまたさまざまな形をとって、生きていかなければなりませんでした。福沢の『痩我慢の説』を読んで、今のわれわれがテーマとしうるのはこの次元の問題です。当時の被支配人民にはまた別の問題があるとしても、会津武士道の精神に育まれ、もしそれが価値あるものだと認識していたかぎり、惨めな敗北を遂げた後で、そのことをまったく忘れ去って「華麗な転身」を遂げて、それで「満足する」satt ということは出来ないでしょう。たとえば、戊辰と維新に際しては、会津藩士と政治的立場はまるで違ってはいましたが、皮肉なことに維新後の西郷隆盛が選んだ生き方は、西郷隆盛の行動の歴史的評価それ自体は別としても、そうした人物像のひとつを示しているのではないでしょうか。西南戦争で天皇の政府に弓引いたにもかかわらず、もともと「西郷どん」と呼ばれて彼ほど国民的人気のある近代史上の人物は少ないですが、それはいったい何故なのかという疑問が私には昔からあります。しかし、西郷論は今は措きます。

維新後旧会津藩士にとって、自分の前にある現実は180度大きく変わってしまいました。帝国軍人や官界に進んだ旧藩士たちは、薩長藩閥政権の下での「宮仕え」を彼ら自身どう考えていたのでしょうか。彼らは現実の転換をリア

ルに見て、内面的には藩＝国意識から脱却して大日本帝国＝統一的国家意識（実際には薩長藩閥の支配する国家）へと転換を遂げたことは確かでしょうが（覚馬は早くからその認識を持っていました）、そこに内面的な苦悶はなかったのでしょうか。いったい人はどのようにして、そのような転換を成し遂げていくものなのだろうか。一変した新しい社会（維新）の中で仮に立身出世を遂げたとしても、あの籠城戦と落城後の苦難と屈辱の記憶は、忠誠心の高かった彼らの心の奥底にしっかりと残っただろうし、人はそれをどうやって乗り越えていくものなのだろうか。転身を遂げていった彼ら旧会津藩士たちの心の中を覗いてみたいという衝動を私は抑えることができません。これはきわめて重要で、また深刻な問題だと私は思うのです。「転身」は余儀なくされた側面があるわけですから、個人の心情に即せば、「忘れる」ことも非難すべきことではありません。原発事故だって日々福島で暮らせば、無かったことにしてしまいたいと思うのは人情というものです。しかし、事は人の現実の公的活動にかかわる問題です。その点では、何らかの公的な活動の場から完全に離れた人間の活動というものはありえないと考えればなおさら、わたしは「重いテーマ」だと思うのです。覚馬の問題を見るときも、そこが私の着眼点です。

覚馬は京都の薩摩藩邸に幽閉中だったので、会津籠城戦には参加していません。幽閉中に薩摩藩主へ宛て「時勢之儀に付拙見申上候書付」と題する「建白書」を（盲目になっていたので）同国の藩士野沢雞一に口述筆記させます。この建白書を基にして、今度は新政府に向けて『管見』（管の中を覗くように、狭い見識だとする謙譲の表現です）を提出しました。その内容は、政体論から教育論、産業論を含む新しい国家構想を述べたもので、新政府首脳の目に留まり、盲目にもかかわらず先を見通したものとして、今の世評では高く評価されるようになりました。『闇はわれを阻まず』と題する鈴木由紀子の前掲書の表題は、この盲人覚馬の「洞察力」に最大級の評価を与えようとした表現ですし、松本健一もその政体論について、三権分立論の最初の提起だとことさら高く評価しています。覚馬の本領は本当にそこにあるのだろうか。覚馬の『管

見』は、福沢の『西洋事情』の焼き直しに過ぎない、という評価も一部には散見されますし、政体論などは、当時の権力状況から言うと、公武一和路線のなかで出てきたものと言えます。似たような議論を提出した他の人物も少なくありません（例えば私の知る限りでも信州上田藩士の赤松小三郎という人物がいます）。

山本覚馬は、海のない東北の山間の盆地に育った会津の藩士でありながら（またそれ故にというべきか、ここにも今後詰めるべき論点があります）、幕末期の新しい国際認識を背景にして、幅広い西洋の知見に支えられたこうした新しい国家像にいち早く到達したことは事実でしょうし、それはまたそれで卓見であったといってもよいでしょう。覚馬は佐久間象山に学びました。象山もまた同じく海のない信州の松代藩出身でした。

私はまた別の角度から、覚馬が西周の『百一新論』を自家出版した事実に注目したいと考えています。覚馬の「転身」の問題は、誠実な人間が、自己の意思とはかかわりなしに転変した新しい環境の中で、かつての誠実（忠誠心）の核を維持しながら一変した環境に如何に対応していくか、人の生き方の普遍的問題として考えるとき、参考になるひとつの具体的なケーススタディとなりましょう。

6、次に、わたしが感じるもうひとつ重要な問題は、いわれなき賊軍とされた会津の名誉回復のあり方の問題です。いまあらためて顕彰さるべき会津藩の側にも問題がないわけではありません。

かつて同じ奥羽越列藩同盟に加わった盛岡南部藩出身の原敬が、政党政治家として初めて内閣総理大臣に就任した後お国入りして、「これでやっと永年の賊軍の汚名が晴れた」と述べたことは有名ですが、と同時に、彼は維新の争いは「政見の違いだった」と言ってのけました。この発言から、原敬の場合は、旧南部藩士に残る根強い「朝敵」＝「賊軍」の汚名意識を、「天皇」の問題あるいは権力の正統性をめぐる問題からは一端切り離して（或はその問題次元を

回避して)、戊辰の戦争を「政治的な闘争」(政治的見解の相違)、すなわち権力闘争と捉えて、戊辰戦争の敗北を、純粋に政治的次元のレベルで捉えていたことが窺えます。権力をめぐる闘争であれば、通常勝者と敗者は、不可避的に生ずるわけだから、いわばゲームのようなものと理解すればよい。「勝てば官軍負ければ賊軍」という言葉はそのことを端的に表現する言葉です。[11]かつての賊軍とされた側の原敬が、政党政治家として総理大臣になった、今度は薩長藩閥政府に対する勝利者になって、その汚名を晴らした、ということになります。

戊辰の敗北をもっぱら権力闘争という純粋に政治的次元において理解することによって、その後の転身の場を彼は政治場裡に求め、そこでの再度の新たな形態での政治闘争で今度は勝利者になる、これでもってかつての敗者に着せられた汚名と賊軍意識の克服を図ったと考えることができます。そして、それをもって原敬は、南部藩の「名誉回復」がなったと考えたのでした。それが原敬による盛岡藩の名誉回復のやり方だったとすれば、旧会津藩の側には、原敬の様な政治感覚と政治認識の持ち主はいなかったのでしょうか。覚馬も含めて今後の重要な課題の一つです。[12]

では「名誉回復」の問題について、会津の側では実際にはどうだったかとい

11　これはある意味で勝者の側に立つ西郷隆盛についてもいえることで、ＴＶでは、会津藩（士）に対して、覚めた公平な目を持って見ていた姿が描かれました。会津征伐後、覚馬と会話する場面で（史実なのかどうか？)、事態の展開次第では「自分たちも会津の立場に置かれたかもしれない」と語っていたシーンがありましたが、これは大変印象的でした。

12　旧会津藩士の場合には、山川浩や佐川官兵衛は、明治維新後陸軍と警視庁に仕官して、西南戦争には戊辰の軍事的雪辱をかけて参加します。山川の出陣にかけた歌も有名です。

「薩摩人 みよや東の 丈夫（ますらお）が 提げ佩く太刀の 利（と）きか鈍きか」

えば、八重もそうですが、一般に会津では、昭和３年（1928）に、松平容保の実子（六男）で在米の外交官であった松平恒雄の娘節子（勢津子）の昭和天皇の弟宮秩父宮へのお興し入れをもって、やっと会津の汚名が晴れたと一様に安堵したと言われます。この時の心情を詠んだ八重の一句もよく知られているところです。

「いくとせか　みねにかかれるむら雲の
　晴れて嬉しき　ひかりをそ見る。」

ついでに、籠城して戦った八重が落城のとき城壁に残した、無念の胸のうちを白壁に刻んだ歌も紹介しておきましょう。

今日流布している歌は、

「明日の夜は　いづくの誰か　ながむらん　馴れし御城に　残す月影」

というものですが、

「あすの夜は　いづくの誰か　ながむらん　なれしみ空に　残す月影」

というのが原歌だとも言われます。

会津にとって昭和３年（ちょうど戊辰の年にあたる年でもあった）、すなわち戊辰戦争後「60年」というのが特別な年であったといわれるのは、旧藩主容保の孫娘の皇室入りというこの出来事に由来します。八重が1928年に詠んだこの歌が、当時の会津人一般の共通の心情を的確に表現したものだとすれば（これまでいろいろ見てきたところから、おそらくそうだったのだろうと私は思っていますが）、南部藩の原敬の場合とは違って、会津では、戊辰戦争を「政治的見解の相違」による権力闘争という次元で捉える、ある意味ではドライな認識にはなかなかお目にかかれない。会津落城および藩に対するその後の措置によって会津が受けた物質的および精神的打撃は盛岡藩に比べてはるかに甚大だったのですが、しかしまた会津の側でのその「敗北」の受認の仕方としたがってまた会津の「名誉回復」の自己了解のあり方にもひとつの問題を私は感じるのです。

「賊軍の汚名」を着せられた会津の藩主容保の孫娘の天皇家への「お興し入れ」によって、やっと「天皇の国家」に受け入れてもらったのだと解釈して、会津の名誉回復を、会津人はもっぱら心情のレベルで自らを納得させた（自己了解した）ということに留意すべきです。原敬の南部藩の場合と比べるとどうしても受身的な態度（あるいは体制順応的な）という印象を受けてしまいます。[13]もしそうだとすれば、ここからは、会津では、維新以後は戊辰の内戦の時よりもいや増しに天皇への忠誠心は過度に肥大化して現れる可能性があります。明治政府の高名な外交官や軍人（たとえば、外交官になった林権助、陸軍大将になった柴五郎など）を多く輩出していくのも、これとあながち無関係ではないのではないかと思います。1928年当時すでに会津を含め東北は政治的にも経済的にも、自由民権運動の弾圧を経て（福島はまた自由民権運動のとくに盛んな地域でもありました）、明治中央政府の従属下にがっちりと組み込まれてしまっていたのが現実でした。この一部の「成功物語」に促されて、民衆もまた天皇への忠誠競争に血道を上げることが考えられます。この問題を考えていくことは、私の頭の中では、原発事故後のわれわれ福島から見た日本国家に対する見方、その見直しの有り様の問題にもかかわってくるような気がします。

つまり「名誉回復」のあり様の問題は、会津の内側の問題としても批判的に検討しなくてはならないということです。冒頭で触れた私の名古屋に住む旧友は、フクシマ事故後の原発再稼動の動きに関して、「福島は別だろうが、原発立地地区の人が原発再稼動を望んでいるんだからどうしようもないよね。」と言いました。その言葉が重く響きます。今日の日本の現実はフクシマ原発事故

13　もともと一般に会津には、藩主への飛びぬけた忠誠心（封建的忠誠）と並んで、幕藩体制下にも強い「勤王精神」があったように思われます。会津藩祖保科家が神道、吉川神道の信仰を持っていたことは、この問題とかかわりがありそうですが、まだ私にはよく分かりません。これも検討しなければなりません。

のことはさておいて、あるいは事故のことは福島に閉じ込めておいて（安倍首相が言った「アンダーコントロール」とは、私の見方では、そのように解釈されます）、原発輸出や原発の再稼動に向けて動き出しています（これもいわゆる「アベノミクス」のひとつでしょう）。新聞報道を見れば、原子力規制委員会の定めた「新基準」による原発の安全審査に電力各社がこぞって申請を提出したのに対して（さすがに東京電力による柏崎刈羽原発の安全審査申請の提出には新潟県知事は「安全より金を優先したと言うことですね」と怒りを隠しませんでしたが）、福島県以外の原発立地地域の市町村レベルの首長は軒並み再稼動歓迎の意向を表明しています。さすがに福島の対応は冷ややかで、県議会では昨年、事故を起こした第一原発のみならず第二原発の「廃炉」要求をも全会一致で決議しています。しかし、その福島でも、清水修二氏は筆者へのある私信（2013年７月７日付け）のなかで、福島県内の69市町村のうち、県内全原発廃炉の意見書を採択していない町村が７つだけあって、「それがじつに、浪江町を除く双葉郡の町村なのです。これは一体どう考えればいいのか」と改めて問題を提起してくれました。[14]

こうした原発立地地区の側に存する問題も念頭に置きながら、本稿では、歴史を遡って、会津戦争の敗北そしてその後の藩士の転身の問題や名誉回復のあり方にスポットを当てて考えようとしています。

14　しかしその後、2013年８月29日に原発が立地する双葉、大熊、富岡、楢葉の４町で作る「県原発所在町協議会」の臨時総会で、やっと第一、第二両原発の「廃炉」を求めていくことで一致したとのことで（2013年８月30日の朝日新聞福島版）、各町村議会で「全原発廃炉決議」への動きが始まりました。しかし、問題は、過去に遡って、「やはり原発を立地したのは誤りであった」ことを、その決議の中にはっきりと書き込むことが出来るかどうかということ、私はこれが一番肝心なことだと思います。そうなれば、現在のところ再稼動を容認するどころか、進んでそれを求める立地地区の市町村にも影響を与えないはずはないと考えられるからです。

7、私のこの論考の草稿段階のものを読んで、テレビドラマ「八重の桜」を見た感想のひとつとして、「結局鳥羽伏見の敗北の後、会津藩だけが貧乏くじを引かされて、辛酸をなめさせられた」のだと四国松山に住むわたしのゼミの卒業生が、メールに書いてきました。彼はかねがね、福島の人々の置かれた「理不尽」な事態を理解し、福島の苦悩に人一倍「共感」を寄せてくれていた人物です。それに重ねて、ドラマ「八重の桜」と幕末維新史をまさに会津の視点に立って見ようとしてくれていたのです。わたしはとても心強く思いました。おそらくや、彼は福島からは遠く離れた松山で、自分の今の持ち場で、そして日常的な仕事を通じて（彼は徳島生協の職員です）、きっと彼なりの福島支援を何らかの形で示してくれるに違いないと確信しています。彼の住む愛媛県にも、伊方原発があり、四国電力はその原発再稼動のために既に安全審査を申請したことも急いで付け加えておきましょう。

福島市内にある小さな福島市資料展示室（「ふれあい歴史館」）があって、そこで過日「幕末維新史の福島」という展示がありました。仙台の奥州征討軍の参謀であった長州藩士世良修造の襲われた料亭の場所とか、殺された場所の詳しい地図が展示されておりました。世良修蔵とは、新政府軍の奥州討伐の際、会津討伐論の先鋒に立った長州藩士で、奇兵隊出身のいわば「成り上がり者」の軍参謀です。奥羽征伐に派遣されてきた新政府軍の仙台鎮撫使の下参謀を務めた人物です。会津（福島）の側から見れば、「悪魔の使い」と称されるほどの嫌われ者です。この福島市内の一角で、女郎と布団の中にいるときに襲われ、奥羽列藩同盟の盟友、仙台藩士の手によって、阿武隈川河畔で斬首されました。これが会津戦争のきっかけになった事はよく知られている事実です。

新政府軍による会津攻撃は、実は勝海舟と西郷隆盛との有名な会談によって成立した江戸城の無血開城（江戸の救済）の代替措置だったと見ることもできます。会津が新政府軍の標的にされたのは、薩摩の裏切りと長州の意趣返しだったというのが、これまで会津側の戊辰戦争に対する大方の見方ですし、薩

長側からすれば、振り上げたこぶしの納めようが、たまたま会津殲滅だったのかも知れません。いずれにせよ、会津からすれば、それはたまったものではありません。そう考えれば、「電力は首都圏へ、放射能は福島へ」（これは福島県民の共通に懐く見解です）という原発事故で露呈した問題構造はまた、戊辰戦争時の薩長政府と会津との関係と全く同じであって、そして、その「悲劇」は今、一世紀半近く経て再び―というのは、幕末維新の混乱の決定的契機になったのは、ペリーに率いられた米艦の来航による「開国」だったからです―「アメリカ」という国家の意思（広島長崎への原爆投下と原子力の「平和利用」宣言）という圧倒的な力に眼眩まされた戦後日本政府（この政府を選んだのは結局日本国民であることも忘れてはいけません）と電力会社の手によって、ともかく「合法的な手続き」を経て、福島県の西側に位置する会津とは今度は反対の東側の浜通りの双葉郡に原発が設置され、今日見るようにその結果は、会津壊滅と同じく過酷な形で、しかももっと巨大な規模で再現されました。そのように言うのは、はたして単に「過剰な被害者意識」に発する極端な物言いでありましょうか。

さらに「罪なき」（これが肝要！）会津を完膚なきまで打ち砕いた圧倒的な新政府軍の新型銃器はその多くは、アメリカの内戦、南北戦争後に回収した武器からもなっていたと言われます。その武器が幕末維新の内乱期の日本に大量に輸入されたという事実にも眼を向ける必要があります。会津を打ち破った武器は福島第一原発の原子炉と同様アメリカの「お古」でした。アメリカでの内戦（南北戦争）終了で不要になった―しかし当時の日本の技術水準からみたら―最新の武器（ライフル銃ミニエー銃、機関銃エンフィールド銃、大砲アームストロング砲）が日本近代の夜明けに、国民同士の戦争（内戦）に使用されたのでした（輸入武器の詳細については、なお詳細な調査を要します）。1866－1868年に50万丁の新型の銃器が輸入されたといわれます。その裏には当然それで大儲けした米国商人と、中古の武器の輸入でこれまた肥え太った日本の政商資本とがいるはずです。そして事故を起こした福島の原発も、結局はアメリカ

の「お古」といえる物でした。当時は新品だった原子炉も、その機器と操作マニュアルも凡てアメリカの物をそのまま採用したという意味では結局「お古」といって差し支えないと思います。

８、それと同時に先に触れた名誉回復のあり方とも関連して、降伏の際の会津藩の側の問題もやはりわれわれの側（福島の側）の問題として見つめないといけません。政治闘争という次元で考えれば、会津藩のあの頑固で拙劣な行き方は、結果的には、藩祖保科正之以来の会津藩「家訓十五箇条」(1668)[15]に縛られたからだという意見もありますが、会津藩主容保が差し出した降伏開城の文書（松平容保上書）の内容にも私は大きな問題を感じています。これは会津の県立博物館で開催された「八重の桜展」を見学して、私の目を引きつけたものでもありました。

まだ必ずしも考えが十分に熟してはいませんが、ごく簡単に言えば、こういうことです。

開城の際の降伏文書のなかで、藩主容保は京都守護職時代の京都での活動について言及し、次のように述べています。

> 京都在職中、「朝廷より大恩を受けながら、万分の微裏も報じ奉らず」、その内に正月に起こった「鳥羽伏見の暴動の一戦において、旨意行き違い、近畿をはばからず、大聴を驚かず」、天皇にそむくという「天地の大罪」を犯した、と。(『2013年ＮＨＫ大河ドラマ特別展「八重の桜」』パンフレット98ページに写真あり。)

15　有名な第一条には「大君の義、一心大切に忠勤に存ずべく、列国の例をもって自ら処るべからず。若し二心を懐かば、則ち我が子孫に非ず、面々決して従うべからず。」とあります。

薩長同盟軍側に対して京都時代の会津藩の全行動を「謝罪」しているのです。これでは、ある種の（岩倉具視らの）策謀によって錦旗を掲げた薩長同盟軍と干戈を交えることになった鳥羽伏見の戦い以来、追い詰められ、征討軍の迫る中籠城して勇敢に戦った会津藩士の立つ瀬がないではないかと思うのです。もとより史実を探れば、会津藩の陥った窮境は、その時点での将軍一橋慶喜（テレビドラマでは小泉純一郎の長男小泉孝太郎が演じているのが又面白い。ＮＨＫのディレクターはうまい配役をしたものだと私は思ってドラマを見ていました）の豹変や裏切りとも思える行動に起因するところが大きいでしょう。会津藩はこの頼りにならない「大君」たる最期の徳川将軍の行動に翻弄され、段々「朝廷と幕府との板ばさみ」になって、結局会津戦争に行き着くことになりました。しかし、追い詰められた会津の最後の敗北に当たって、藩主容保が差し出した降伏文書の内容にはやはり看過出来ない大きな問題があると思います。

奥羽列藩同盟の結成の契機になったのは、仙台米沢両藩による朝廷への会津藩の謝罪取り成しでしたが、降伏文書となった「謝罪文」の内容は、籠城段階での実務的な降伏交渉の過程で決まったことでしょうから、現実的にどういう内容の文面なら可能でありえたかという問題は残るにしても、会津藩の京都守護職時代の行動は、朝廷に対する恭順の姿勢を示した行動であったことは否定できません。政局次元で見れば、おそらく「公武一和」の路線に乗ったものであったといえるでしょう。しかしその丸ごとの否定と全面的謝罪では会津藩士は受け容れがたいのではあるまいか。ここには会津藩士の「やり場の無い立場」が見えてくる気がします。核廃棄物中間貯蔵施設の双葉郡への設置という政府の提案についても、また除染にかかわる「やり場の無い不満」が福島県民の中には渦巻いていますが、それと全く同じです。

結びに代えて

会津戦争は戊辰戦争の最後の局面に位置づけられ、中央政府を掌握した薩長を主力とする西軍と東軍（東北地方・会津）との内戦、流血の政治権力闘争でした。会津を支援して追い詰められた奥羽越列藩同盟には、おぼろげながら、ある種の「独立国家」の構想さえあったという事実が研究史で明らかにされつつあります（例えば、佐々木克『戊辰戦争』中公新書）。これには藤井徳行「明治元年・所謂『東北朝廷』成立に関する一考察―輪王寺宮公現法親王をめぐって―」という専門論文（手塚豊編著『近代日本史の新研究Ⅰ』所収、北樹出版、1981）があることを最近になって知りました。この点はもっともっと研究する必要があるでしょう。敗者側の藩士たちの死、籠城して果てた会津藩士はじめ奥羽諸藩の藩士の死、そしてまたそれと同様に、先の大戦で散って行ったあの日本兵士の命はなんだったのか。彼らの信じた「大義」の後始末、そしてあの戦争の敗者となって散っていった兵士の死を弔う仕方を、いまだわれわれ日本の国民はしかるべき形で見出してはいません。だから、会津敗戦の物語は、現代の「歴史への責任問題」にもつながる論点を提起するものにもなると考えられます。

それから、先に触れたように、会津藩主の降伏の仕方そして敗戦処理の仕方が、敗者の側の「名誉回復」のあり方をも根底から規定すると考えるならば、会津藩主の「謝罪」の内容は拙かった。そしてその後の会津人の「名誉回復」の仕方とその了解の仕方を見ると、ＮＨＫドラマが讃えるように、会津藩士の忠誠心は見事なものであったと感嘆することはできますが、やや突き放した見方をして、会津は（戊辰以後60年を経て、旧藩主の孫娘の皇室入りという形で）天皇家に繋がったという一点をもって了解し、それでもって自らを慰めざるをえなかったと考えると、私にはここにもやるせないもうひとつの「会津の悲劇」が見えてくるような気がします。それはまた、「フクシマの悲劇」とそ

こからの復興の「精神」の有り様の問題につながるように見えて仕方ありません。

以上、まだまだ不充分なものですが、「八重の桜」に触発されてこれまで勉強したもののうちから、私の最近の頭のなかをかけめぐった問題のいくつかを述べてみました。今後の私自身の研究テーマ設定のよすがとしたいと思います。忌憚のないご批判を乞うしだいです。（了）

（2013年12月19日脱稿）
（2014年１月12日初校校正）

【付　記】

正月休みに長谷川つとむ『会津藩最後の首席家老』（中公文庫、1999年）に接しました。

これは梶原平馬の物語です。梶原平馬は、奥羽越列藩同盟の結成に活躍して、最後の籠城戦で政務総督として指揮を取った人物として知られていますが、私も武器商人だったシュネル兄弟から会津藩の武器調達にも奔走した人物としてとくに関心を持っていました。（兄のエドワルド・シュネルが落城後会津人をカリフォルニア移住させた話も面白いものがあります。木村毅『明治建設「エル・ドラドおけい」の物語』恒文社、1981年参照。）しかし正面から平馬を扱ったものを今まで見たことがなかったので、興味深く読みました。作者は平馬を曾祖父にもつ人で、ファウスト研究者でもあるそうです。その作者が、落城後の平馬の行方を追跡して書いた小説風の読み物です。平馬は藩主の守護職就任で上洛して、若くして24歳で家老となりますが、在京中に京都の町谷の娘テイと恋仲になりました。これで山川家の長女二葉と離縁した事情がはっきりしました。本書では、平馬が新しい妻テイと共に会津に帰還したあと、籠城戦を指揮して戦い、幽囚がとかれた後斗南から蝦夷に渡って、最後は根室で生涯を終えるまでの筋と並んで、新妻テイと二人で暮らした「人間的な」愛の物語がもうひとつの筋になっています。客観的な梶原平馬論として全体的な評価はまだ難しいのですが、本稿で取り上げた「転身」の問題に関していえば、籠城戦の最高責任者であったために、本来な

らば萱野権兵衛に代わって、自分が責任を取るべき立場であったことを意識し続けて、その後の人生を蝦夷の地に求め、いわば草莽のなかでひっそりと暮らした平馬像が浮かび上がります。したがって指令官クラスの会津藩士の転身の一つのパターンを見ることが出来るように思われました。その点では、本文で触れた敗戦処理の役割を主として引き受けた山川浩と比較して論ずると面白いかもしれません。　（2014年１月12日付記）